目にも見えない形すらない幸せ

ドーナツ教開祖　安藤ナツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
目にも見えない形すらない幸せ

【Ｎコード】
Ｎ５７０６Ｎ

【作者名】
ドーナツ教開祖　安藤ナツ

【あらすじ】
『処刑人』新里世界と『殺人鬼』天音多々良の殺人劇。
穢れた処刑人と、汚れた殺人鬼が語る幸せ論。

（前書き）

この作品は私の長編、『人生不敗　地獄に咲くのは向日葵』のネタバレを含みます。

勿論、次回作『人生不敗　鬼の目にも情』のネタバレも含んでいます。

勿論ネタが割れても何度も見てしまう作品が名作と呼ばれるんですが。

「なあ、一つ質問していいかい？」

幾つもの陰謀と、数えきれない暴力が跋扈する国、日本。
テレビや新聞と言ったメディアが、国が変わる国を変えると、少々誇大妄想気味な発言をする大人たちを祭り上げている最中、新里世界はとある地方都市の廃ビルの三階にいた。
癖の強い銀髪に、生物学的に怪しい緋色の宝玉の瞳。病的なまでに青白い肌を覆う服は、ボタンの代わりにベルトが付いた、珍妙な黒い詰襟の学生服。
何かのコスプレとしか思えない風貌のその青年は、目の前の人間にそう訊ねた。

「どうして、お前は人を殺すんだ？」

コンクリートの床に散らばる肉片を眺めながら、きついツリ目を鋭く、その声は見かけとは裏腹に高く訊ねた。

「うーん。言ってもわかんないと思うけど」

一際大きな肉片を蹴飛ばしながら、世界の正面に立った女が腕を組む。その距離は約五メートル。世界であれば一歩で縮めることのできるこの短い間合いには、最低でも二人分の肉片が転がっていた。巨大な獣に食い千切られたような、無理矢理バラバラにされたその血肉の塊の放つ悪臭を吸い込みながら、女は笑って答える。
緩いウェーブのかかった綺麗な茶髪と銀縁のメガネ、その女性らしいラインが浮き出る高級そうなブラックのスーツ姿。いかにも優秀そうなＯＬと言った風貌の女であった。美人とは呼べるが、見た

目のインパクトは世界には遥かに劣っている。もっとも、床に染み込んでいく血液を眺めるその笑顔は酷く印象に残るだろうが。

「幸せになるためよ」

「ああ？　人を殺すのが、お前の幸せなのか？　だったら、いかれてるぜ、天音多々良」

唾を吐き捨てながら、目の前の人間が改めて『殺人鬼』と恐れられる人種なのだと世界は実感した。

「死体に唾を吐き捨てるあんたも、いかれているわよ？　《地獄期間》ちゃん」

鬱陶しそうに前髪を書き上げながら、多々良が指摘すると、

「死体に人権は勿体ねーよ。どうせ、回収されて肥料か材料のどっちかになるんだ。俺の唾がかかろうと、かかっていまいと、大した差はねーよ。論点をすり替えるな」

足元にあった内臓器官を一つ踏み潰して見せる世界。聞くに堪えない音がしたが、それを気にする人間はこのビルには誰もいない。

二人に言わせて見れば、命とはそこまで尊くも貴くもないモノのようだ。

「それにさ、生きてるってなんだよ？」

そもそも、世界にはタンパク質の塊を生きていると表現することに違和感があった。

結局人間は外部の刺激を受け、それを電気信号で運んで反応を返すだけの装置にすぎない。どれもこれも、電気信号のおもちゃじゃ

あないか。どれだけ説明を受けようと、人間とリモコンで動くテレビやエアコンの差異がそこまで尊ぶべきモノには思えないのだ。
思考する、思索する、思案する脳味噌ですら、電気信号で動いているらしい。
じゃあ、心なんてどこにあるんだ？　自分なんて、決まった反応を繰り返す枷ではないか。
命なんて、安っぽい電気の塊だ。生きているなんて、幻想だ。

「生きてるっていうのは、動いてるってことだろ？　ああ、電気ってすげーよ」
「……やっぱり、あんたも可笑しいわよ。確信した」

死者を冒涜するだけでなく、生きているすべての人間を否定するようなことを、一分の誇張も一理の揶揄も込めずに語る銀髪緋眼の青年を、殺人鬼が否定する。

「普通、そんな考えにはいたらないわよ。命と機械を同一に扱うなんて、私みたいな殺人鬼でもしない。むしろ、殺人鬼の私の方が命のことを深く思っているんじゃあないの？　だって、人を殺そうと思っても、エアコンを壊そうとは思わないもん。私は、命の大切さを知っているから、人を殺すの。あんたの方が人間として破綻してる」

自らを抱きしめるようにして、多々良は断言する。殺人を始めてから早三年。百じゃあ足りなくなる人間を殺戮してきた多々良だったが、いつでもどこでも、命の意味を考えてきた彼女ではあったが、世界のような結論に至ったことは一度もない。
答えが出たことはないが、人間と機械は比べるまでもなく違うものだ。それくらいの結果は出してある。そもそも、同一と錯覚する時点で、何処がと言わずすべてがおかしい。

そんな当たり前のことを理解していない世界には、悪名高い殺人鬼の天音多々良も引かざるを得なかった。

「それに、私の『幸せになるため』って言うのは多分、あんたが考えるのとは意味が違う」

「どう言う意味だ？」

「あんたは、全員が幸せになれると思う？」

突然、殺人鬼はそんなことを言った。小学生のような疑問を口にする多々良を鼻で笑った後に、世界が短く、「無理だろ」と答えた。

幸せの背景には、誰かの不幸が必要だ。

そんなことはない、幸せと言うのは個々の考えで、誰かは必要ない。と言うかもしれない。が、比較するモノのない幸せは、当たり前でしかない。過去の自分の不幸と比較すれば、全人類が幸せになれるかもしれない？　過去の自分はすべての人類に入らないのだろうか？　一体、この世の何処に幸福があるのだろうか？

「そうそう。その通りよ、でも、私は幸せになりたいの。今日、選挙なんだって。知ってた？　政治家の人たちは、口々に私たちの暮らしを保障してくれるけど、幸せは保障してくれないでしょ？」

「幸せね。確かに、究極的には個人の感覚だからな」

「でしょう？　幸せっていうのは、個人の感覚なのよ。『生活は楽になった、でも幸福にはなれてない』なんて寝言は言わない。だって、幸せは自分の感覚で想像するものなんだもの」

「それがどうしたんだよ」

一体、幸せとは個人の感覚だという話がどうして、廃ビルでの殺人活動につながるのか。世界は少しだけ苛立って話の続きを促した。

「でも、幸せって言うのが一人一人違うのっておかしくない？」

「さっきと言ってることが逆じゃねーか」

イライラと銀髪を右手でかき混ぜる世界。

「だって、全員の幸せが違ったら、『幸せ』なんて単語生まれないんじゃないの？」

俺は、お金を持っていると幸せだ。

ぼくの幸せは、家族との団欒かな。

このやり取りに、多々良は矛盾を感じずにはいられなかった。

この時二人の『幸せ』は、お金と家族と全く違った形を持っている。それなのに何故、自分の『幸せ』とは別の形の『幸せ』を、『幸せ』と認識できるのだろうか。

後者は、お金に一切の『幸せ』を感じないとしよう。それなのに、前者の『幸せ』と後者の『幸せ』の意味に齟齬は生まれていないのだ。

全く別の物に、同じ『幸せ』と言う感想を持ってしまうのだ。

「なるほど。幸せの『意味』が分からないってことか」

顎に手を当てて、世界は多々良の言葉にようやく納得する。

「なんで、絵の『林檎』も、兎さんにカットされた『林檎』も、全然持つ意味が違うのに、『林檎』って呼ぶのか？　そういう話だろ？」

兎さんって。多々良は成人に近い男性の口からそんな単語が出ることに意外な衝撃を受けつつ、「そんな所よ」と腕を組んで笑う。もしかしたら、白い皮膚や髪の毛と、緋色の瞳から、世界は兎と同胞意識があるのかもしれない。

「だから、私は思うの。『幸せ』の意味を知れば、私は幸せになれるんじゃあないかって。万人と言う万人を幸せだと思う意味がないか、私は聞いて回ってるの。この世の人間全員に『幸せ』を教えて貰えれば、きっと『幸せ』の意味がわかるわ」
「……だったら、どうして殺す必要がある？」
「だって、同じ人間に質問しちゃったら面倒でしょ？」

ビンゴゲームで、出てきた数字の欄を潰すのと同じ。
殺人鬼たる天音多々良にとって、人殺しとはその程度の意味しかない。人命とは、複雑な形をした面倒な本と変わりない。
結局、この殺人鬼だって、人間なんて微塵も興味がないのだろう。興味があるのは自分の欲望を満たす答えのみ。

「オッケー、オッケー。俺もあんたも狂って狂って狂ってるそれでいいだろう？」

わかりやすくて良いと、世界はうっすらと口元を歪めて笑う。

「だったら、話し合いは無駄だろう？　俺たちは絶対理解し合えない」

まったく悲しくもなさそうに、微塵も寂しくなさそうに、世界が笑う。

「ぎゃはははは！　いいね、シンプルだ！　わかり合えないなら」

唇を裂かんばかりに、世界が凄惨な笑みを見せて世界が笑う。

「闘うしかないだろう？」

「あら、坊やはお姉さんと話にきたわけじゃないの？」

ケラケラと笑い声を上げる世界から、腕を組んだまま一歩引く多々良。

殺人中に突然現れたこの銀髪緋眼の男は、やはり自分のファンと言うわけではなさそうだ。

「仕事だよ」冗談を、鼻で笑う世界。

「人殺しの現行犯だ。死ね」

言いながら、世界が動いた。

ほとんど身体を前に倒すように傾け、その極端な体重移動を前進へのベクトルとして使う。絶妙なバランス感覚と、それを支える筋力によってなせる『縮地』と呼ばれる特殊な歩法。

字の如く、世界は一瞬の内に多々良との間合いを詰める。

「っち」

短く舌打ちをして、多々良は組んでいた腕をほどく。

が、それでは遅い。

一瞬で血と肉を飛び越えた世界が、躊躇なく『縮地』の運動エネルギーを丸々拳に乗せ、多々良の顔面にそれをぶち込んだ。

メガネが割れる音の後に、鼻の骨が折れる軽い音が二人の鼓膜を揺らす。

「があっ」

両手を中途半端に曲げた格好のまま、多々良の身体が宙に浮いて回転しながら吹き飛ぶ。二度三度と冷たいコンクリートの床に激突し、スーツと皮膚を削り取られながらその勢いが少しずつ殺されて

いく。
勿論、その様子を見学するほど甘い世界ではない。
新里世界の仕事の名前は、わかりやすく言えば処刑人だ。クライアントの仕事を受けた仲介人から、仕事を貰って人を殺す。現代日本とは思えないくらい、ぼろい商売だ。
その経歴はわずか一年と言う、駆け出し中の駆け出しではある世界だが、油断や驕りが死を招くということは、しっかり理解していた。
多々良が吹き飛んだ方向を確認するや否や、世界は手に突き刺さったメガネのフレームを引っこ抜いて投げ捨てると、身を低くして飛び出した。

「この、ガキが！」

足音を聞いて、血を流す鼻を庇いながら、急いで多々良は立ち上がる。彼女とて、超能力者。痛みで気を失うとか、恐怖に怯むだとか、そんな段階はとうに超越している。
スーツのジャケットはおろか、中のカッターシャツのボタンまでもがことごとく吹き飛び、白い滑らかな肌を露わにしながら、臨戦態勢を取ろうとする多々良。

「舐めるなよ！」

激高しながら、多々良は右手を前に突き出す。一体、如何なる超能力を呼び起こそうというのだろうか。
しかし、それも中途で断絶される。
立ち上がった彼女の目の前に迫った、世界の履いていた運動靴の裏によって。

「舌噛むぜ？」

フライングドロップキック。
おおよそプロレスの中でしか見られないような大技が、華奢な多々良の顔面にめり込む。先ほどの拳よりも、さらにスピードと体重の乗った残酷な跳び蹴りに、彼女の頭部はコンパスのようにきれいな弧を描いて地面に後頭部を打ちつける。
聴いただけで生理的な嫌悪が走る、嫌な音を響かせた頭部は、コンクリートの地面に少しだけめり込んでいた。
少々やり過ぎた感があるが、油断はできない。
一応、自分でも問題なく倒せるランクの相手を選んだつもりだが、命を賭けた真剣勝負に絶対の優位など存在しない。相手の息の根が止まるまで、勝負は終わらないのだ。
それに殺人鬼と言う人種は、まずそれだけで脅威だ。
不安定なままで安定していると言うべきか、不完全品として完成しているというか、その思考と思想は何をするかわからない。
過去二回ある殺人鬼の戦闘に置いて、世界は二度の逃走を許している。しかも、一度は仲間に助けられるという惨めな思い出付きだ。
そんな過去を思い出し、世界は一呼吸おいて多々良の出方を窺う。

「どうした？　天音多々良。おしまいか？」

わざとらしく自分の耳に手を当てて、挑発的なポーズをする世界。
暫くの間をおいて、

「そんなわけないですよ、世界君」

多々良が立ち上がった。
ただ、その声の質は幾分か幼さを含んだ高いものに変わり、喋り方も先ほどまでの多々良の物ではなかった。
ただそれは、世界のよく知る人物の喋り方であった。

いや、口調だけではない。
目の前で鼻血を垂らしていた二十代後半だった多々良の姿は、セーラー服を着ツインテールのあどけない少女へと変わっていた。
「向日葵……」
二か月前に手を取って助け合った最愛の少女の名前を呟く。多々良の姿は、寸分狂いなく、日向向日葵の物へと変貌していた。
「あはは！　驚いてますね？　吃驚仰天ですよね？　これが私の超能力なんですよ、世界君。《戯画》の多々良とは私のことなんです」
「……精神感応系の超能力か」
眩暈がするのを覚えながら、あっさりと、世界は目の前で起こった現象を看破する。
「多分『その人の幸せを感じる人間だと錯覚させる』能力だな」
理屈は必要ない。大切なのは目の前の現実。
「人の幸せに漬け込むとは、厄介なお姉ーさんだ」
「ピンポンピンポ～ン！　大正解ですよ、世界君！　私は私は、あなたの『幸せの形』を模倣した妄想夢想想像ですよー。もっとも、世界君がそう感じているのであって、私自身は普通に話しているだけですから、その向日葵ちゃんの姿形はわからないんですけど。でもでも、意外ですね、あなたに好きな女の子がいるなんて。私、嫉妬しちゃいそう！」
「それ以上喋るな。下種が」
「あららら！　私なんて可愛らしモンじゃあないですか。だって、《戯画》ですよ？　あなたは《地獄期間》で、私は子供の戯れ。一

体どっちが下種でしょうか？　あなたの力がなんなのか、私は一切合財知りませんが、『地獄』の文字を持つ能力者なんて他にいますか？　いないですよね？　きゃはははは！　地獄の鬼も、子供の遊びには敵いませんか？」

世界の動揺を見て、饒舌になる多々良。

この能力は無敵の盾だ、多々良はそう自負していた。

幸せとは、究極的な目標であり、絶対に崩せない砦であり、人間を殺しうる棺桶だ。

彼女はこの能力を使って、人間をおびき寄せては殺し、その姿で情を惹いて世界のような処刑人から逃げ出す。まるで妖怪のように、この三年間をそうやって生きてきた。

人間は、幸せに絶望的なまでに弱い。

「あなたは、幸せを壊せますか？　世界君」

「喋るなって言っているだろう？」

勝ち誇ったように笑う多々良の顔面を、世界が躊躇なく蹴飛ばした。鋭いハイキックが、多々良のこめかみを綺麗に穿った。

「っ！　がぁ　え？」

本日三度目の頭部へのダメージは、多々良の身体に限界を迎えさせた。先ほどまでのように派手には吹き飛びはしないが、膝から力が抜け、仰向けに倒れる多々良。

「なんだよ。この程度か」

溜め息雑じりに、世界は足を上げて、本日三度目の地面の味を確かめる多々良の右手を踏みつけた。右手の指先を粉々に砕き、その

上の関節を逆側に曲がるまで蹂躙する。

「ぐぁ！　っつううう。な、何で、私を攻撃できるんですか？」

痛みに涙しながら、かわいらしい、女子高生の声で多々良が問う。

いくら中身が別人だとは言え、自分の好きな人間の形をしたモノをここまで徹底して破壊できるものだろうか？　キリシタンなら踏絵ですら嫌がるというのに、血も肉も温度も声もその個性まである、自らの『幸せ』の模倣を、侵せるものなのだろうか？

「何でって、言ったろ？　命なんて、機械と変わらないって。機械を壊すのに、手加減がいるのか？」

「な？　この娘は、貴方の大切な人じゃあないのですか？　私の能力が発動していないのですか？」

痛みをこらえて、納得のいかない多々良が叫ぶ。

そんなことを聴いているのではない。関係ない人間なら、大した抵抗なしに殺せる人間はいるだろう。多々良もそういった人間の一人だ。自分以外の命に、深い重要性を感じてはいない。

多々良が聴きたいのは、何故自分の好きな人間を、心から幸せと思える存在を、こうも簡単に殺せるのかだ。

答えはシンプル。

「大切だから、俺の好きにするんだろう？」

故に、難解だった。

全く持って理解が追いつかない、世界の理論。この世ではない《地獄期間》のルール。

その異端の掟に、殺人鬼は自分のことを棚に上げて恐怖した。目の前の悪魔に。
恐怖が焦燥を呼び、多々良はそれに打ち勝つために咆哮する。

「うわあああ！」

素早くまだ動く左手を動かして、はだけたジャケットの内ポケットから、多々良は護身用に持っていた拳銃を取り出す。名前も知らない、武骨な武器の使用は、超能力者としてのプライドを少なからず傷つけたが、そんなものは些事だった。
目の前の悪魔の方が、十も百も恐ろしかった。
乾いた、想像よりも大きな発砲音が四度、廃ビルに響く。その反動が、粉々にされた右腕に響き、多々良の口からは嗚咽が漏れる。

「おいおい、セーフティもかけてねーのかよ」

対して、世界は余裕綽々とそんな返事を返す。処刑人に限らず、超能力者に取って、鉛弾を飛ばす程度の武器は恐れるに足らないのだ。超能力者の敏感な感覚器官は殺気すら捉え、常軌を逸した肉体は音速の弾丸すら回避する。
もっとも、世界に限定して言えば、かわす必要すらないのだが。
その証拠に、世界は四発の弾丸全てをその身体に受けても、平然と生きているのだから。

「嘘？」

右肩。左脇腹。胸部。そして、右の瞳の少し上。そこには確かに風穴が貫通し、尋常ではない量の血液が噴水のように吹き出ている。
にもかかわらず、世界は生きていた。

「驚いたか？　これが俺の《地獄期間》だ」

困ったように肩を竦めて世界が喋っている間に、四つの傷が世界の身体から消え去る。吹き出た血液すらも、一瞬に。ビデオを巻き戻すというよりは、バグを修正したように、正しい姿を上書きしたように、世界の身体が修繕されていく。流石に、服に開いた穴までは不可能だったが。

その様子を見て、多々良の恐怖は最高潮に達した。

あまりに、その様子は生命を冒涜している。生きるということを否定している。

死ぬと言う、不文律を馬鹿にしていた。

「墓場生まれの地獄育ち。百万回死ねない男。不死に不老に不滅の矛盾。それが俺、新里世界さんの《地獄期間》だ」

なるほど。なるほど。多々良は声にならない悲鳴と同時に、深く納得した。

生命と機械を同じだという世界を、《地獄期間》と言う二つ名の意味を。新里世界は人間ではないという事実を。地獄に人間はいないのだから、当然だ。

「因みに、お前がどれだけ向日葵に見えようと、俺には関係ない」

死刑を宣告する裁判官のように厳かに、世界が口を動かす。

「姿形や口調を真似た所で、良くできた入れ物だよ。大切なのは、魂だろう？　精神だろう？　肉体なんて、精神を入れる器に違いない。俺が尊敬するのは、生きている事実じゃあねえ。生きているから生まれる『魂』だ」

新里世界は死ねない。窒息しようが、毒を盛られようが、心臓が停まろうが、頭が霧散しようが、たとえＡＢＣ兵器が直撃しようが、世界には午後のティータイムと変わりない。三歳の時には既に、今の体格であったので、これ以上の老化も見込めない。

そんな《地獄期間》が命を重んじるわけがない。無限にあるものを大切に思えるわけがない。

そんな彼にとって、大切なのは個性だ。魂だ。精神だ。

その人以外持ちえない、模倣はできても複製はできない、究極の不完全な芸術品。

それが、《地獄期間》新里世界の最も愛する概念だ。

「だからだろうな。俺にはわかるんだよ。お前の魂が腐りきっていて、決して向日葵じゃあねえってことがな」

ケラケラと笑って、世界は右足をゆっくりと右足を上げる。

血で汚れた有名メーカー製のシューズが、まるでギロチンのような存在感を放って、多々良の頭上で揺れた。

「助けて！　お願い！」

恐怖で噛み合わない口を必死に動かして、多々良が懇願する。

「本当なら、生かしてやりたい。何故なら、俺は生死に興味がないからな」

器用に足を上げたまま、世界は殺人鬼との最後の会話をする。

「でも、お前は俺みたいに、人の尊厳を恐怖で踏みにじって、幸せを訊ねるんだろう？」

「しない！　もうしないから！　お願い助けて！」

年下の青年に、殺人鬼は大人げもプライドもなく、体中の孔と言う孔から体液を駄々漏れにしながら、叫ぶ。
しかし。目の前の処刑人にとって、それはただ機械の喧しいエラーのようなモノだ。
自分にとって正しくない『魂』は、いつなくなっても問題ない。

「ああ」

思い出したように世界は、口元だけ笑って、多々良の永遠の問題に答える。

「俺の幸せは、お前なんかには教えてやらねーよ」

無慈悲に振り下ろされた右足の踵が、多々良の顔面を踏み砕いた。
廃ビルにもう一つだけ死体が増えた。

「あーあ。徒手空拳は楽だけど、汚れるのだけがネックだぜ」

新里世界にとって、人間の死とはそんなものであった。

?

（後書き）

ってなわけで、こんな世界君が殺されたり殺されたりするラブコメが明日から始まります。

短編のテーマも募集しています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5706n/

目にも見えない形すらない幸せ

2010年10月9日06時39分発行